寂室元光 ―人とその書―

はじめに

八日市市の東南、愛知川が鈴鹿山地より湖東平野に流れ出す所に蹤石山永源寺が閑静な佇まいを見せています。最近では、深緑や紅葉の名所としても名高く、春・秋ともなれば永源寺を訪れる人も多いようです。永源寺は、今からほぼ620年の昔、寂室元光禅師(1290～1367）が近江守護佐々木六角氏頼(1326～70)に請われて開山となった禅宗寺院で、全国から寂室の教えを受けようと多くの僧が集まり、臨済禅の一大道場となった所です。佐々木六角氏は、鎌倉時代のはじめより(この頃はまだ六角という呼称はない）永禄11年(1568)織田信長の侵攻によって滅ぶまで、約400年間近江の地を支配した大大名です。六角氏歴代の中でも、氏頼はとりわけ篤信の人で、京都五山版（鎌倉末期から室町前期にかけて、京五山を中心に禅僧によって木版で印刷刊行された書籍。）の開板願主となったり、大般若経六百巻の開板事業（氏頼の法名崇永から崇永版という。）を行うなど、仏教帰依の作善が多く残されている人としても有名です。この氏頼が、栄達を望まず、諸国を行脚して修行を積む寂室元光を招いて創建したのが永源寺なのです。

現在、永源寺やその他には、寂室元光の肖像彫刻や墨跡などが多く所蔵されていますが、ここでは墨跡をとりあげ、寂室元光の人となりを紹介しましょう。

墨跡とは

中国では肉筆全般をさす言葉として「墨跡」が使われていますが、わが国では禅僧の筆跡にだけしか「墨跡」という言葉は使いません。従って、同じ僧侶であっても、最澄や親鸞などの筆跡は墨跡とは呼ばないのです。このような限定した使い方があらわれるのは、室町時代の初め頃といわれていますが、この頃に一般人の書から区別して、禅僧のそれを「墨跡」と呼ぶようになったのはそれなりの理由があります。鎌倉時代前期、栄西と道元によって、おのおの臨済宗と曹洞宗がわが国にもたらされたことは周知のことですが、これを日本禅宗史の創成期とすれば、鎌倉後期から室町前期にかけては最盛期ということができます。この時代、禅僧は宗教・文化のみならず、政治・外交にも活躍し、彼らの深い学識や語学力は当時の日本にとってはなくてはな

塑像寂室和尚坐像　　永源寺

1982. 1. 31

財団法人　滋賀県文化財保護協会

らないものでした。当時武士たちは、自分の師として禅僧に深く帰依し、自らの死の問題においても、禅僧の教えから多くを学ぼうとしています。例えば、足利尊氏の子で初代鎌倉公方となった基氏(1340～67)は、寂室元光に「生死到来候はば其の時の所存は何れに向ふ可く候哉」という書簡を送り、問うています。それに対して、寂室は「願わくば、只だ疑情破れざる処に向って参ぜよ。行往座臥、放捨することを得ざれ。」(『寂室録』)と答えています。

また、禅宗はたくさんある仏教宗派の中でも、言うなれば、個性が非常に尊重される宗派です。禅宗においては自己修練の積み重ねの中で各自の悟りを得ることに力点がおかれています。この悟りは師から弟子へ伝えられるものですが、先にも述べましたように、極めて個性的であるため、そのまま弟子に押しつけることはありません。師は弟子の修業過程で役立つ助言として「墨跡」を与え、弟子はこの墨跡を師の人格を表わすものとして尊重し大切に保存しました。

わが国の禅宗は、先述の臨済宗・曹洞宗と、江戸時代はじめ中国僧隠元隆琦が伝えた黄檗宗の三宗派ですが、残されている墨跡の多くは臨済僧のものです。これには、臨済宗と茶道との関係もその一つの理由として考えられます。室町後期に茶道を大成した村田珠光・武野紹鷗・千利休らは、皆臨済僧に教えを受け、自らも剃髪しております。彼らは茶室床の間の掛け物として、茶の理想とする禅の言葉（墨跡）を掛けました。茶道の流行とともに、部屋飾りとして墨跡がもてはやされ、おのずと臨済宗関係の墨跡が多く書かれ、大切に保存されてきたのです。

寂室元光の書

寂室元光は、正応３年(1290)作州（今の岡山県）高田に生まれ、幼少の頃父母の命に従い、京都東福寺大智海禅師の下で沙弥となりました。やがて、元光は当時の禅僧の登竜門

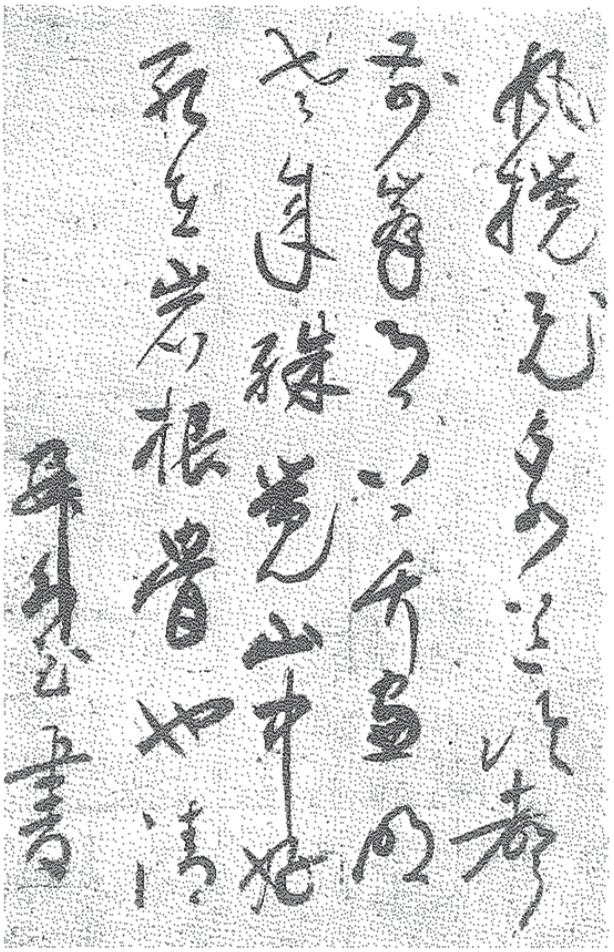

図１　風攪飛泉詩　　永源寺

ともいうべき鎌倉建長寺の約翁徳倹（仏燈国師）の下で修行に励みます。約翁禅師は、わが国に純粋禅をもたらし建長寺開山となった南宋の蘭溪道隆（大覚禅師）の直弟子で、師にもまして厳格な人であったといわれています。元光が約翁禅師の下に入室する前夜、諸聖が天上から降って、山河に光明が輝きわたった夢を見たので、入寺してきた寂室に「元光」の法名を与えたとされています。一年余りの鎌倉生活の後、師約翁の京都建仁寺への招聘に伴って、元光も上洛していますが、それ以前にも増して元光は厳しい修業を積んでおります。その間にも、元朝から来日した一山一寧らに疑を問い、また侍者を努めております。元応２年(1320)多くの禅僧がそうであったように、元光も入元を果し、元僧の中峰明本禅師の下に赴き、７年間の問法参究を重ね、また名山・巨刹を訪ねて、嘉暦元年(1326)帰朝しました。詔命による大寺への招聘を拒

み、ひたすら坐禅に励んだ中峰明本禅師の姿勢は、帰朝後の元光に決定的な影響を与えたといえます。つまり、帰朝した元光は長勝寺・万寿寺・建仁寺など大寺院からの招聘を受けましたが、元光はそれらを断って諸国へ行脚しております。

さて、常に厳しい修行を重ねた寂室元光の書には、その強い精神性と修辞の学に基づいた詩文の学識があらわれています。例えば、図1

風は飛泉を攪いて冷声を送り
前峯月上って竹窓明らかなり
老来殊に覚ゆ山中の好しきを
死して岩根に在れば骨(ほね)也清し

これは風攪飛泉詩とよばれ、寂室元光の詩といえばこの詩を連想する程著名な詩です。『永源寂室和尚語録』という書物によれば、「書金蔵山壁二首」とあって、その二にあたるものです。兵庫県出石の金蔵山の草庵に寄寓していた折に作られたものです。眼前の風景を詠じながら、自らの人生の選択――栄達を捨て山中に隠棲することを好しとする覚悟が表明された偈頌(げじゅ)です。偈頌は、五言または七言の韻文体の詩形式をもっていますが、内容的に禅家の悟りの境地などを表現したものを、一般の詩と区別して偈頌といっております。また、散文体で書かれるものを法語といいます。図2は法語の例です。

人、後に二祖に遇ふ。一言にして便(すなわ)ち了す。始めて従前虚用の工夫を知んぬ。山僧今日見る処、祖仏と別ならず。若第一句中に得れば、祖仏と師と為(な)す。若第二句中に得れば、人天と師と為す。若第三句中に得れば、自ら救ふて了せず。

文章の具合いから見て前の文が欠けていると思われ、内容は今一つ理解し難いのですが、元光の書法を見るのに好例な作品です。筆先が前の字の終筆を受けて無理なく次の字の構成へ向かっています。そして、一字一字注意深く見ていきますと、流れるような書体の中

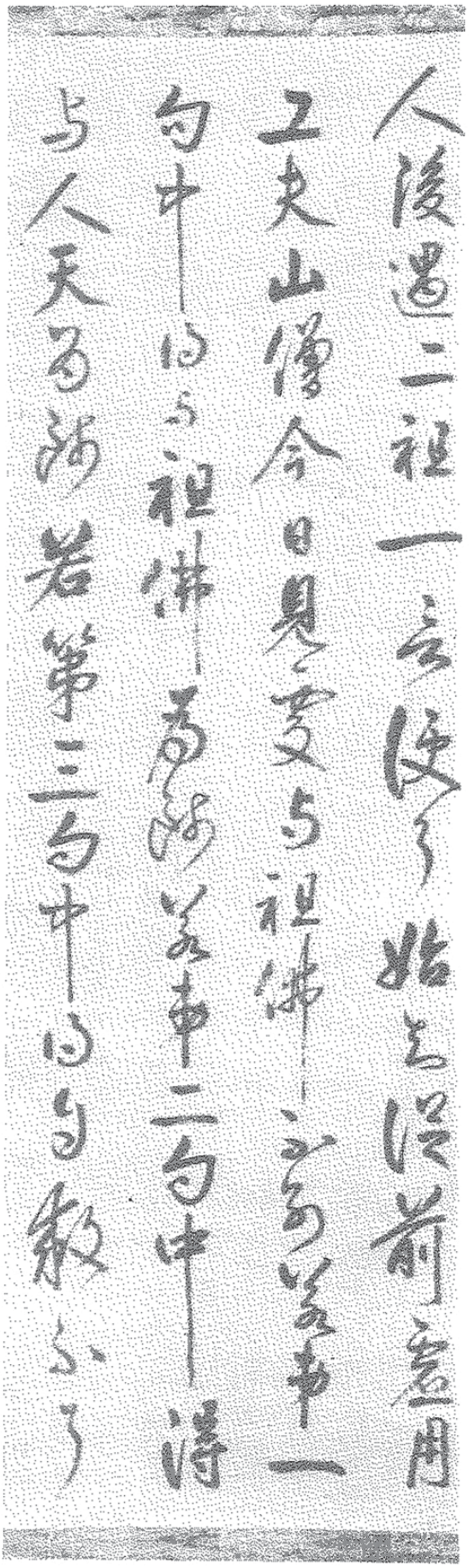

図2　法　語　　根津美術館

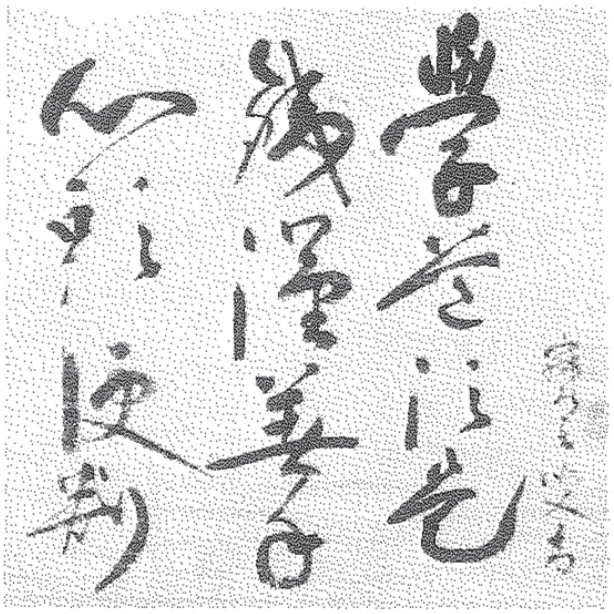

図3　三行書　　永源寺

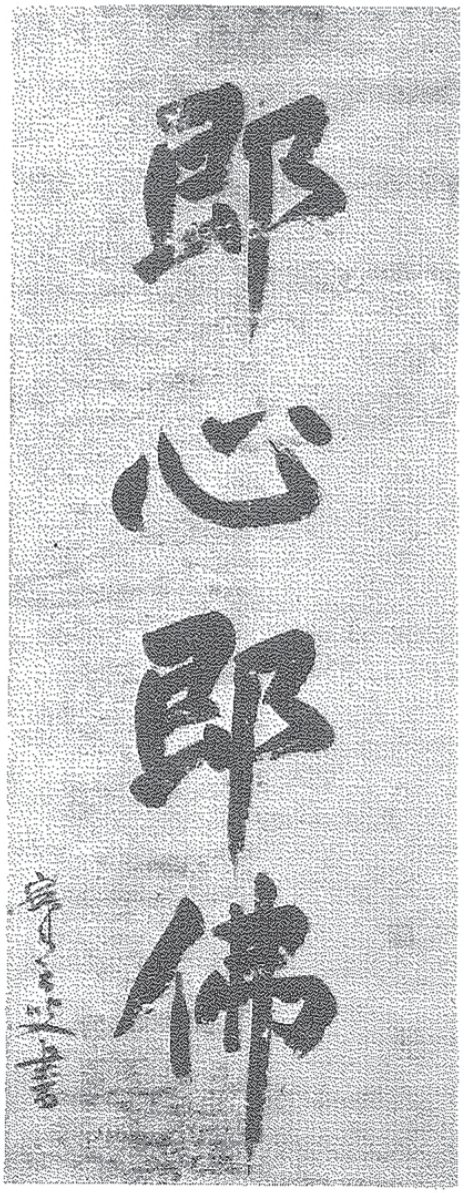

図5　一行書　　永源寺

で緩急のリズムがこれを書いている元光の胸の鼓動と共鳴したかのように一つの規則正しいリズムをもっているのがわかります。図3は、

寂室叟為
学道須く是れ銕漢なるべし
手を心頭に着けて便ち判ず

というもので、修学上の要訣を表現した文句です。寂室が最も好んだ語といわれています。右下に「寂室叟為」とあることから、寂室が誰かの為に書き与えたことが知られ、もとは対幅で他の一幅にこの書を与えられた人の名が書かれていたと思われます。いずれにしろ、運筆になんの衒いもなく、矻矻たる気魄が伝わってくるもので、修学に対する寂室元光の厳格な態度を示す書といえるのではないでしょうか。次に掲げた図4は、弟子の一人偉禅人という人に「傑堂」という雅号を与えた偈です。

門風挺出す万人の頭
寂莫の庭前丈草の秋
正に是れ衆中に尊貴堕つ
灯籠の露柱笑い休み難し
右偉禅人の為めに
傑堂の雅号に題す
寂室元光

このように禅宗では師が弟子に号を与えるとき、偈を書き与えますが、これは弟子にとって一定の修業過程を終了した証明書ともいうべき意味合いがありました。

今まで紹介した墨跡はすべて行書体ですが、

図4　傑堂号偈　　大和文華館

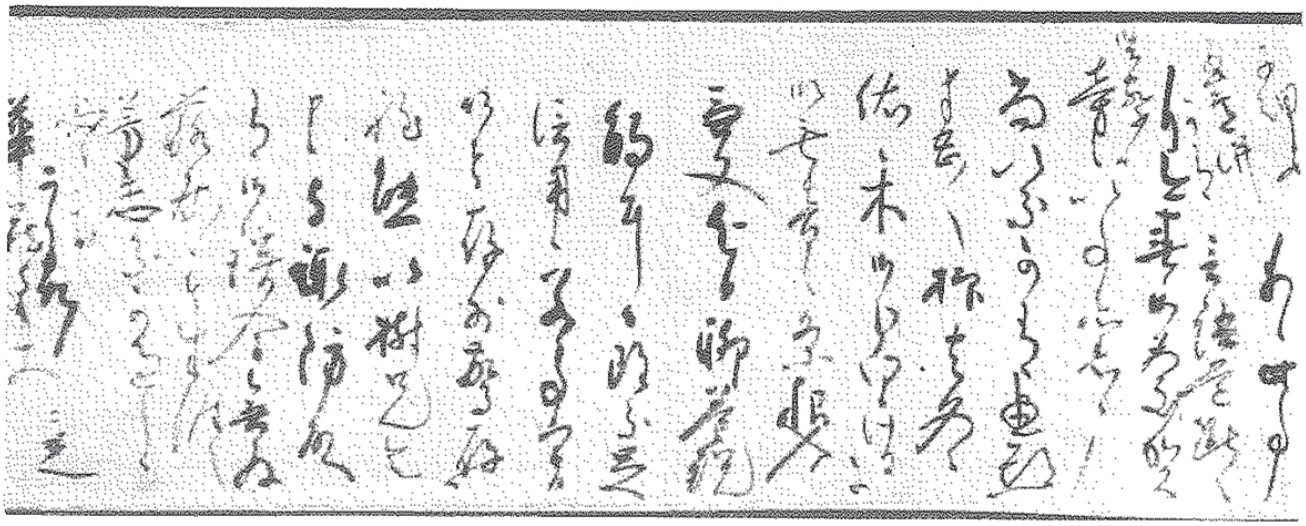

図6　書　状　　永源寺

次に楷書をあげてみましょう。図5は「即心即仏」と大字で力強く書かれています。禅宗では、「即心即仏、非心非仏」という言葉を法語・偈にしばしば使われています。寂室もまたこの言葉をよく用いています。これは、唐の時代の僧馬祖道一(709～786)の言葉で、馬祖禅の理念といわれているものです。

次に、寂室の書状です(図6)。京都西山にある華蔵院の黙翁妙成に宛てられたもので、正月以降の挨拶を兼ねて、何か巷説の信否をたしかめたものです。文中で「佐々木御下向」とあるのは六角氏頼を指しています。一見してこれまで紹介した書体とは異なり、私信であるためリラックスした筆の運びが見られるとともに、寂室の草書体の筆跡を知ることができます。

さて、貞治6年(1367)9月1日寂室元光は、方丈の含空台において入寂します。享年78才でした。それに先立ち、「老拙、如今世縁将に尽きなんとす。因って諸の法属（法縁）等に顧命（臨終に際しての命令）す」として、遺誡（図7）を、そして、入寂のその日遺偈（図8）を書しています。遺誡では死後の処理を事詳かに指示されています。

一、埋葬の時は首楞厳神呪を一度となえるだけでよい。

一、佐々木氏頼から寄進された熊原の地は大守佐々木氏に返還し、建物は土地の者

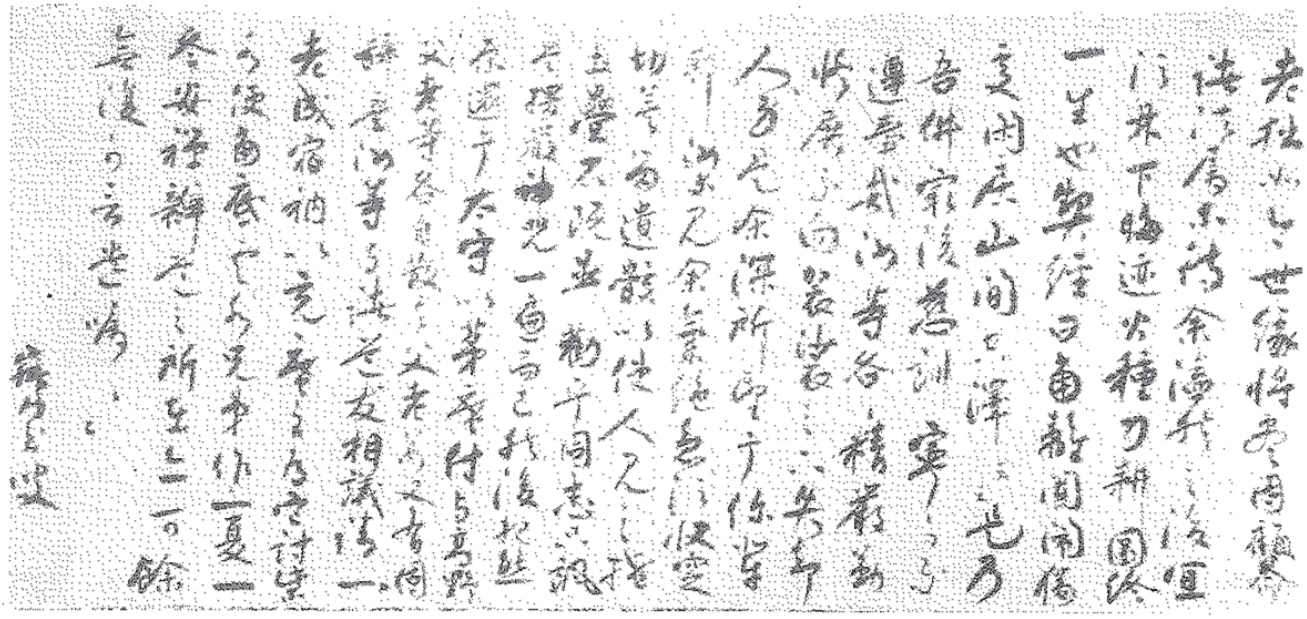

図7　遺　誡　　永源寺

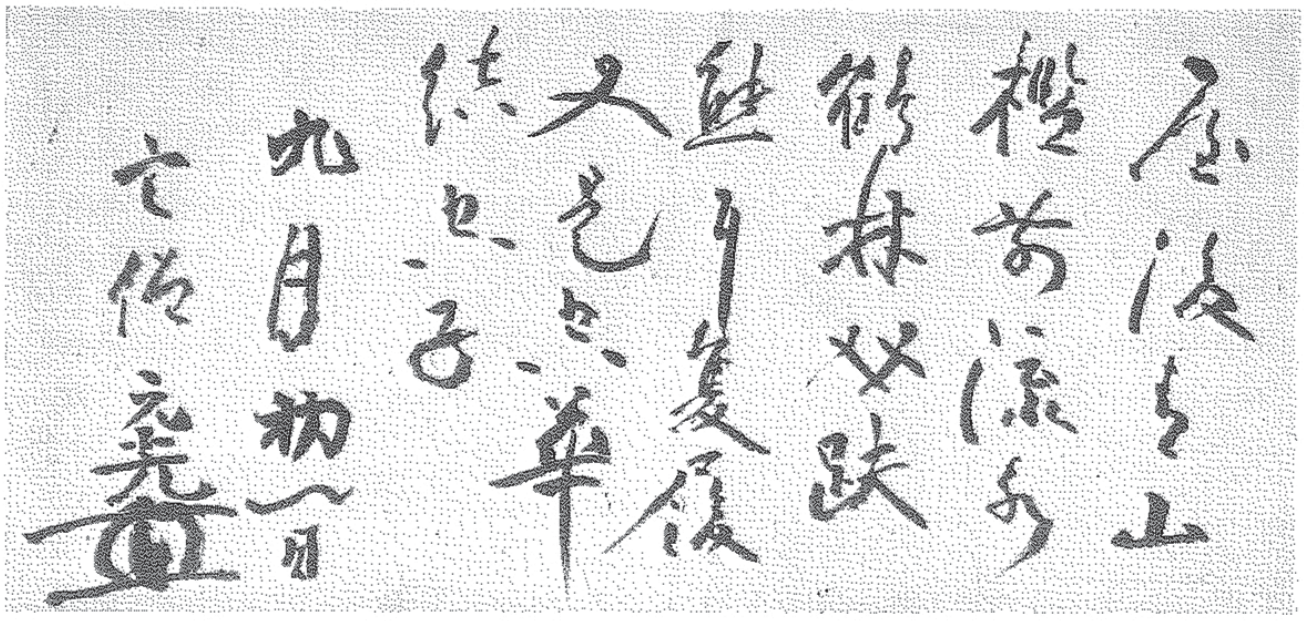

図8　遺　偈　　永源寺

に与え、各自離散せよ。

一、土地の者が固辞した時は雲水（行脚僧）の修業の道場とせよ。

と命示しています。私たちは、潔癖で禅の真理を求めることだけに努力した寂室元光の姿勢が、晩年に至っても少しも変わっていないことを読みとることができるのです。

遺偈では、

屋後の青山
檻前の流水
鶴林の双跌
熊耳の隻履
又是れ空華
空子を結ぶ

九月初一日　亡僧　元光（花押）

首二句は永源寺の景観を詠じています。一度永源寺を訪れた人にとって、あの美しい自然が僅か8文字で端的に表現されていることに驚かずにはいられません。三・四句では、釈迦と達磨の悲慈の故事がうたわれています。鶴林とは沙羅樹林のことで、熊耳は達磨の葬られた熊耳山です。五・六句では、病んだ眼が幻の華が子を結ぶのだと詠じています。遺偈は禅宗独特のもので、彼ら禅僧が臨終に際して自らがたどりついた禅的真理の結晶を吐露したものです。現在、多くの遺偈が残されていますが、寂室の遺偈はとりわけ迫真に迫まるものといえましょう。渾身の力を振り絞って書しながらも、字体は波打っています。末尾の「亡僧」という言葉には激しい鬼気さえ感じられるものです。この墨跡の前に立てば、厳しい警策の音が耳もとで響くような錯覚に襲われるのは、筆者一人ではないでしょう。

生涯栄誉を好まず、山深い山居で自らの存在を問い続けた寂室元光の墨跡は、単に書の鑑賞だけに留まらず、書とは何か、いったい人間の書く文字とは精神の一つの発露ではなかったかということを現代に生きる私達に問い返しています。形あるものすべてが「空華」であるならば、寂室の「書」もまた「空華」です。しかし、「空華」にも「空子」を結ぶといった寂室の言葉は、雑然とした現代社会において、私達は何をすべきなのかを暗示しているように私には思えます。

寂室元光の墨跡を紹介するだけの任を与えられた私は、少々おしゃべりが過ぎたようですが、ただ、一般の書とは異なり、私達が墨跡を鑑賞しようとする場合、とりわけ鑑賞者自身がその書に対峙しようとしない限り、墨跡の真の意味、「書」という芸術の美は見えてこないのではないでしょうか。

（土井通弘氏提供）